

59. 小説「石狩川」の「伊達邦夷」の名の読み

問 小説「石狩川」の主要人物「伊達邦夷」の名は、どのように読むのですか。

答 「石狩川」(本庄陸男〔むつお〕)に登場する「伊達邦夷」は、実在の人物「伊達邦直〔くに(1)なお〕」をモデルにしたものです。小説の本文では、『いまや邦夷は家来に恃んでゐることも出来なくなつた。』をはじめ、各所に出てきますが、ルビをつけていません。そのため、正しい読みを知ることは極めて困難です。僅かに、「本庄陸男の研究」(布野栄一)の中に「『石狩川』モデル考」という論考があり、これに当りますと、『邦夷』と読みが示されていますので、これによる以外にはないようです。

注(1) 長編小説。本庄陸男が昭和13年9月から14年2月まで、同人雑誌「槐」〔えんじゅ〕に発表、第4章以下は書下ろしで昭和14年5月大観堂から単行本として刊行された。今は「新潮文庫」などの文庫本としても出ている。維新の変革で、伊達家の一門岩出山1万4千石余は召上げられ、僅かに65石の扶持米を受ける悲運に陥り、家中736人、その家族3千6百余名は、途端に生活の基盤を失ってしまった。家老阿賀妻謙〔本名吾妻謙、あがつまけん〕は、邦夷に諮って北海道移住を執行した。明治4年3月、主従160名の第一次開拓集団は、石狩のシップに入殖したが、こゝは全くの不毛地。苦心の請願の結果代替地はトウベツとなった。だが原始の密林を踏査する辛酸は言語に絶し、石狩の激流に吞まれる犠牲者さえ出た。開拓資金も食糧も底をついた絶対絶命の危機を、石狩税庫建設を請負うことによつて漸く切抜け、刀を棄てた武士団は、不慣れな鋤を必死にふるった。その間、食糧買付失敗の責任をとり切腹して果てたものもあり、阿賀妻に反目して官員に転身したものもあった。言語に絶する苦闘の末、漸く前途の見通しがつくと、主従5人は第2次移住者を募るために帰郷した。しかし、故郷の情勢は一変しており、阿賀妻は命をねらわれる有様であった。応募者は182名。一行は1カ月もかゝって、石狩の浜にたどりついた。人々は千辛万苦をかさね、当別町を築き上げて行く。終始はりつめた筆致の格調高い歴史小説の雄編と評せられ、亀井勝一郎は北海道版『夜明け前』と激賞した。作者は当別の生れで、父祖の開拓の痛苦に、自身の思想転向の問題を重ねて、本庄陸男自身の自己を語った作品であるともいわれる。

注(2) 「日本人名大事典」(平凡社)に『ほんじょうむつお 本庄陸男 一九〇五～三九 小説家。明治三十八年二月二十日北海道石狩郡当別町に生る。一興、ハヤの六男。紋別高等小学校卒業後、代用教員、製紙工場などで働き、大正十年(一九二一)上京し

て青山師範に入学、卒業後本郷誠之小学校に奉職、教員生活を送った。昭和三年(一九二八)日本プロレタリア作家同盟に参加、教育評論を中心に精力的な評論活動を展開した。同五年教育組合事件で職を失い、プロレタリア文学運動に専心した。運動崩壊後、九年亀井勝一郎らと『現実』を創刊、これを機に筆力を回復し、短編『白い壁』を発表、作家的力量を広く認められた。同十一年武田麟太郎主宰『人民文庫』の発行名義人となり、編集担当、十三年大井広介らと『槐』創刊、同誌に長編『石狩川』を連載し、非常に好評を博した。昭和十四年七月二十三日病没。』とある。

注(3) 幼名大力、通称英橋また弾正、天保5年〔1834〕9月12日生、伊達家一門、岩出山邑主。明治2年、その弟巨理邑主伊達邦成と謀り、北海道開拓を請願し、石狩国札幌、空知2郡の開墾を許された。翌年2月先づ先遣隊を従えて渡航し、現地の分割を受けた。翌年3月2日男女160名を率いて岩出山を出発、4月4日到着し、原始の大地に挑んだ。5年3月更に旧臣182名を移住させた。辛苦艱難言語に絶したという。12年2月また56戸210名を移した。14年2月准陸軍少尉に任じ開拓使七等属に兼任された。同年5月功績顕著なりとして特旨従六位に叙せられた。移住以来、率先粉骨、地を開くこと1千町余、人を移すこと3千余人、開拓の功績極めて大なるものがあった。明治24年1月12日歿、享年58。その子正人、父邦直の功に依り華族に列し、男爵を授けられた。大正4年11月更に正五位を追賜された。なお、邦直の業績については、「当別町史」(当別町編)に詳記してある。北海道開拓を、歴史家は「北地跋涉」〔ほくちばっしょう〕と称する。岩出山のほか、巨理伊達邦成・同家老田村顕允〔現伊達市〕・角田石川義光・泉麟太郎〔現夕張郡の内〕・白石片倉邦憲〔現札幌市内〕らの指導者のもとに、渡道したもの1,362戸、約8千人、このように多数で、しかもすぐれた成功を収めた実例は、他になかった。

資料 本庄陸男の研究(布野栄一)

60. 幾世小佐治の墓

問 幾代小佐治の墓は何処にあるのか、またこれに関する資料にどのようなものがあるか。
(1)

答 名取市の高館川上の旧東海道、青熊川に小橋小佐治橋があり、その南阿元から約50メートル離れた地点に、道路をさしはさんで、東側に小佐治の墓、西側に幾世の墓と伝えられるものがあります。墓碑には梵字が残っているだけであるが、昔は「永和二丙辰年〔1376〕三月十五日」と刻
(2)